

## 手光立花木遺跡発掘調査

所在地 : 福津市手光字立花木 2236-1 他  
調査要因 : 福津消防署建設  
調査期間 : 令和5年4月20日～同5年7月24日  
調査面積 : 約 853 m<sup>2</sup>  
調査担当者 : 文化財課文化財係 田上 浩司 高木 慎太郎

### ■地理的・歴史的環境

手光立花木遺跡は、手光今川中流域の沖積地から少し高い、海拔 13～14m の微高地に位置する。本遺跡は手光今川の沖積地を一望できる立地にあり、この沖積地を生産拠点とする人々の生活拠点とも考えられる。

周辺では手光於緑遺跡において、阿高式土器・鐘崎式土器・三万田式土器の土器片が包含層中から出土している。その他にも弥生前期～古墳前期までの土器をはじめ、多量の木製品も出土している。

### ■検出遺構・遺物

#### 【遺構】

竪穴建物 3 棟、掘立柱建物 2 棟、土坑 2 基、鍛冶土坑 4 基、小穴多数

#### 【遺物】

縄文土器、弥生土器（弥生前期）、黒曜石、鉄滓

### ■所見

調査地では縄文時代中期・後期、弥生時代早期、奈良時代の遺構・遺物を検出している。調査区の東側と西側にそれぞれ別の尾根が走り、調査区中央部にはその尾根に挟まれた谷がある。遺構密度は尾根上から斜面にかけて多く、谷底においては密度が少ない。

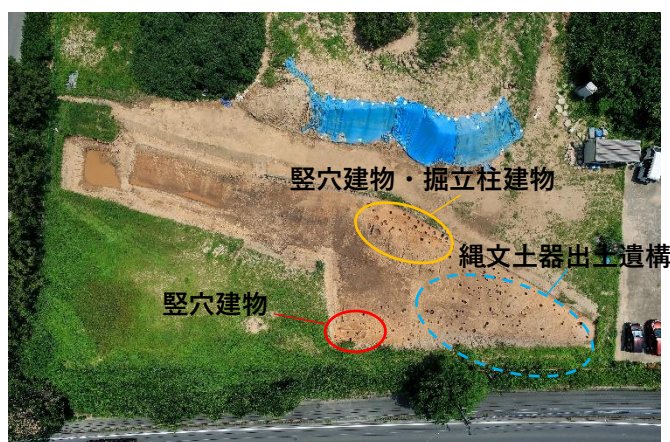
竪穴建物は調査区西側の尾根上で 1 棟、東側尾根上で 2 棟検出した。平面形は長楕円形を呈し、一部周壁溝と思われる溝が残存している。弥生時代早期と考えられる土器片、黒曜石が出土している。東側尾根上で検出した竪穴建物は 2 棟が切りあって検出された。平面形は 2 棟ともに方形になると推測される。出土遺物が細片であり年代の判別が難しいが、周辺遺構の状況を踏まえると、奈良・平安時代の所産と考えられる。掘立柱建物は東側尾根上にある。調査区外にも柱穴が存在すると考えられ、全体の規模は不明である。現状で残存しているのは SB-01 が 2 間、SB-02 が 3 間×1 間である。

調査区東側の尾根上において、焼土が上面に堆積した遺構を 4 基検出している。焼土層の下層より細片の土器、鉄滓が出土している。奈良・平安時代の鍛冶炉の可能性もある。

出土遺物としては、市内において遺構に伴って縄文土器が出土した初例となった縄文土器が特徴的である。調査区南側の土坑及び小穴から出土している。胎土に滑石を多く含み、赤褐色を呈することから、縄文中期の所産と考えられる。その他にも縄文時代後期の土器と思われる資料も複数出土している。



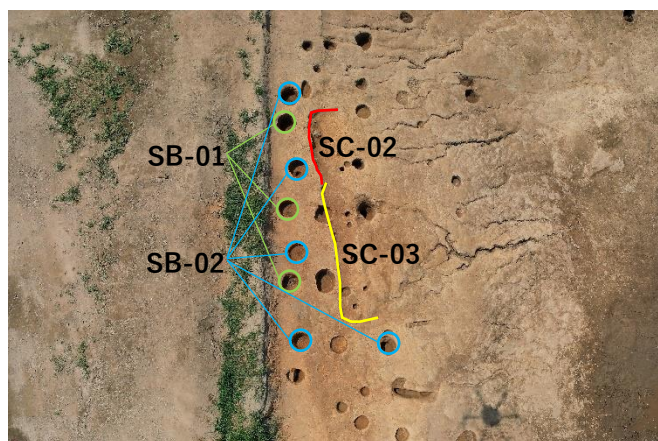
手光立花木遺跡位置図 (S=1/5000)



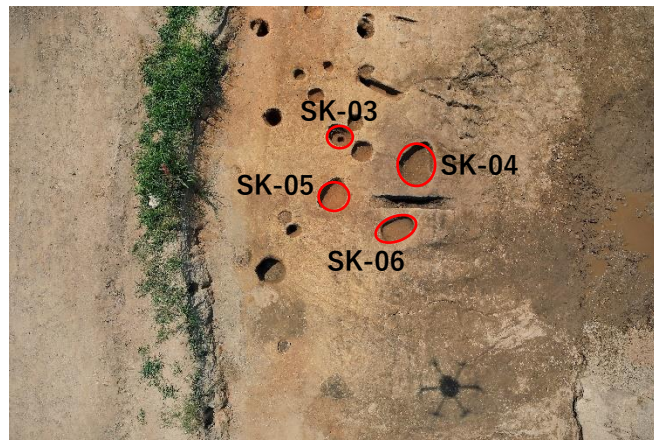
調査区全景 (西から)



竪穴建物 SC-01 全景 (北東から)



竪穴建物 SC-02・03 掘立柱建物 SB-01・02 全景 (北から)



鍛冶炉か? SK-03・04・05・06 (北東から)